
悉洞

文目查

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

洞悉

【Zコード】

Z9454M

【作者名】

文目杳

【あらすじ】

私は或る時辞書に就いて、辞書を引きたくなった。辞書は辞書を如何認知しているか知りたかったからだ。辞書は其れに就いて詳らかに語る。併し、私は辞書が本当に其れを知っているか知りたくて、其れを構成している語に就いて問い合わせた。辞書は私の発問を聞くと語り出した。

(前書き)

微巧な表現があります。人によつては不快になるかもしれません。

或る時「辞書」に就いて辞書を引こうと思つた。そう思い立つと、私の手は棚に存在感を大きく示す其れを手に取つていた。机の上に置くと其れは堆い紙の山となり私の目前に聳立する。紙を木立とする山だ。私の指が紙に触れる。そして、辞書式に配列された字の内を手探りで模索する。その度、手の愛撫に因り紙が靡く。古ぼけた風が馥郁と薫る。そして、幾らかその動作を繰り返し目的の其れが目に留まる。辞書には斯う記されていた。

「「1」多くの言葉や文字を一定の基準によつて配列し、その表記法・発音・語源・意味・用法などを記した書物。国語辞書・漢和辞書・外国語辞書・百科辞書のほか、ある分野の語を集めた特殊辞書、ある専門分野の語を集めた専門辞書などの種類がある。辞典。辞彙(じい)。語彙。字書。字引。」

私はこの堆い辞書を見ながら斯う思つた。辞書は画龍である。その画から賛臨して天を貫く龍だ。多くの賢者に描かれた龍なのだ。賢者其々が客觀性を求め、多くの熟考の結果に出来上がつた思考の混淆である。そして、その龍に伏在する錯綜された思考は恰も人間の様に映りだす。そして、私の目前にある「辞書」という語はその龍の自らの認知である。そして、私の頭に「自分自身を知りうる書物とは乙なものだ。」という考えが過つた。

また、私の中に一つの懷疑が生まれる。「辞書」を然様に認識しているのならば、彼は其れを構成する言句を如何認知しているのだろうか。机に置いてあつた付箋を其の頁に張り付ける。私はそんなことを思うと頁を捲る手が止まらなくなつた。「言葉」という字を引いた。彼は「言葉」という言葉を知つていた。併し、そこには「社会」、「思想」、「感情」、「表現」という語が現れた。彼が其れを知つてゐるかは分からなかつた。其れは彼のみが知ることである。私には其れは知り得ない。私は其の頁に赤の付箋を貼り、頁を

捲る。私の目には紙が駆々と優雅に横切る姿が映つた。其れは流星群であつた。彼が社会に就いて語りだす。そこには「生活」、「影響」、「相互」、「人」という言葉が彼の口から出でてきた。私は彼に「人」について發問する。彼は詳らかに語る。彼は滔々と「人に就いて語る。そして、彼の口から「個人」、「ホモ・サピエンス」、「能力」、「人間」、「性質」、「人格」などという語が現れた。勿論、其れに就いて彼に尋ねた。彼は莞爾しながら悠然と語りだした。

幾らか辞書の前にいると或る事に気付いた。辞書というのは客觀性を重要視して書くのだから、説明される語も或る程度定まつた語でないとならないということだ。私の「辞書」から始めたこの行為は決して「辞書」という類別を超えることはできない。だから、私はその語を構成している語だけを調べるだけではなく、その語に隣している語にも目を向けることにした。

抑々、私は彼の問答を目的としていたが、いつの間にかに彼自身の通曉が目的となつっていた。彼を知りたかった。私は彼に恋をしたようだ。彼との対話を通し、私は次第に彼と親昵し、いつの間にかに其の親しみは愛へと遷移したようだ。彼の全てを、彼の知を詳らかに知りたかったのだ。また、彼の全てを知ることでこの世界の蒙昧に光が差すと考えた。これは私の世界への愛なのだろう。彼と話すたび私の世界は広がり、そして、世界というものに愛情が芽生えたのだ。

或る数学者が研究に就いて斯う語つていたことを思い出した。朝起きてから数学をするのではなく、数学をしている間にいつの間にかに寝、起きた刹那数学の世界に入つてないと数学はできない。私はこれを聞いた時「学問と同衾する」という言葉が思い浮かんだ。

現在の私にはそれが漠然と理解できる。朝、目が覚めると真っ先に彼の下へ足を運ぶ。そして、彼と幾らか話し、朝食を作る。朝食を食べ終わり、机へ向かい彼と話す。部屋に鳴り響く頁を捲る音や紙の掠れるが彼の声の様に聞こえる。彼との談笑に夢中になり気がつ

けば日は暮れていた。勿論、彼との交歓の合間に食事を挟んでいる。そして、床へ就く。そんな生活を幾許も続けてきた。朝日が彼を照らし、月が彼を華やかせる光景を幾つも見てきた。そんな私は彼と同衾しているといえるだろう。

彼から教えてもらつた語に「書淫」という言葉がある。本を読むことに耽る、という意味だ。私はその書といつ語と淫といつ語の混淆に妖艶を感じていた。書という知識の集合に淫行するという想像に私を駆り立てた。それこそ私と彼の同衾ではないだろうか。私と彼の距離は最早目睫の間である。彼の対話はいつの間にかに接吻へと変わり、私が貞を捲る音は彼の嬌声であつた。それを彼に言うと、「囁語」と彼に返されてしまう。然様な諧謔を私は浮かべていた。

或る時、私は彼の言葉に新鮮味を感じなくなつてしまつた。私は驚き、辺りを見渡す。併し、どの言葉も全て諳んじたものであつた。私は初めの貞から読み始める。どの言葉も見覚えがあつた。私は焦り貞を捲る。どの言葉も目を通したことの在るものだ。私の貞を捲る手が早くなる。ついに捲る貞が無くなつてしまつた。そして、付箋だけの巨大な本が私の前に在るだけであつた。伏臥した辞書を目の前に私は呆然としていた。幾らか時間が経つと、私は月が辞書を煌々と照らすのを見て、何か思い出すかの様に外へ飛び出した。窓を開けると外の香りが私の鼻を撫つた。そして、空に浮かぶ大きく真丸な月が美しかつた。

私は塔を登つていった。多くのものが築き上げた高く高く聳立する塔だ。それを彼と共に登攀していった。塔の中には世界を明らめるような幾つもの財宝が在つた。塔の中には多くの人が築き上げた物語が存在した。私は彼と共に其れを眺めながら塔を登つていて。塔を登り終わると、彼は私の前から忽然として消えてしまつた。その塔を登り終えたからと云つて世界の真理がわかつた訳でもなかつた。在るのは私が塔を涉獵したという事実と、私の目の前に遣つて來た世界だけであつた。開豁とした星空に、心地の好い風、夜から馥郁と薫る匂い、そして、大きな月が其處にあつた。彼を照らし出して

いたあの月は燦然と輝いていた。
さんぜん

(後書き)

参考文献

・Yahoo!辞書 大辞林

<http://dic.yahoo.co.jp/>
・Sugaku hatairyoku da!

<http://www.math.tsukuba.ac.jp/~kazunari/Kimurata/kimurata.htm>

m₁

作中にある或る数学者の言葉は此処の「5・数学研究の心構え」に記述されている佐藤幹夫先生の言葉を参考にさせて頂きました。

・哲学辞典（平凡社）

・あとがき。

あ一つかれたー 久々に本気で文章書いたわー
本気で書いたからあとがきも長いよ！ 適度に流してね。

どうも、作者です。読了有難うござります。

自分は辞書を読むのが好きなんで辞書に就いて何か書いてみたいな、と思つていました。

おそらくこの物語の原点は三木清先生の「辞書の客觀性」でしょう。
この文章を読んでから、この物語みたいに辞書を読む物語を書こう
と決めました。

或る時平凡社の哲学辞典の一番初めにある「愛」の項をみて「これ
だ！」と思いました。

最初のプロットは主人公が哲学辞典を読み世界を洞悉しようとする
んだけど、ある言葉が蟠りになつていて、その言葉を探す。
で、最後の最後に見つけた「愛」という言葉を読みこの言葉だった
んだな、と氷解し辞書を閉じ物語の幕は閉じられる

て、内容だったんだけど、俺哲学分からないから書くのを見送りました。

した。

そして、「哲学辞書じゃなくて、普通の辞書でもいいよなー」とか
思つて、なんやかんやで骨格が出来上がりました。

或る時平凡社の哲学辞書で自我に就いて調べた際、ソクラテスの名
前が載つてあったので辞書に問答法をするといつ訳のわからない発
想が思い浮かびました。w

これが始まりの「辞書に就いて辞書を引く」、「辞書はそれを知つ
ているのだろうか」というのに起因しています。

しかし、まだまだ書くには心細いと思つていました。

そんなとき出会つたが三木清先生の「哲学入門」の

「哲学者は全知者と無知者との中間者である」とプラトンはいつた。
全く知らない者は哲学しないであろう、全く知つてゐる者も哲学し
ないであらう、哲学は無知と全知との中間であり、無知から知への
運動である。不完全性から完全性へのこの運動は愛と呼ばれた。哲
学は、それにあたるギリシア語の「フィロソフィア」という言葉が
意味するように、知識の愛である。」

という文です。

これを読み今のこの物語を思いつきました。

辞書に恋をしそう、辞書を読み終わつたらさみしい感じにしそう、
と思いました。

これがこの物語完成の流れです。

いやあ本当にこれは書いてて楽しかった。

如何に辞書を美しくするかとか考えながら書きました。

あまり自分は文章書かないの、短くしようとして、短い中でどの
様に辞書らしさ、辞書を読んでいる雰囲気を描写しようか悩みまし
た。

それが「書淫」だつたり、「藝語」だつたりするわけです。

ああそれと、如何して最後の燐然にルビが振つてあるかと云うと・
・

それは「さんせん」で辞書を引いてください。w

あと、主人公の性について言及しておきます。恋愛っぽいところも書いたので。

主人公は文章上の次元に立っているので其処に性は存在いたしません。また、辞書の性は俺が男性なので彼にしてます。それはつまり有性という意味を持ちます。つまり、有性と無性の恋愛というわけです。

さすがにこれは苦しいか・・・

不満な点。

独白調なので、主人公を作者が演じ切らねばならない。つまり、辞書を読破した主人公にならないといけない。

俺は勿論大辞林を読破してないので演じきるのは不可能。しかも、即興で何とかできないので今の自分の辞書に対する愛を語るしかない。

そこら辺が表現不足だと思う。

辞書を長年読むのだが、それを描写せねばならない。つまり、最後に描かれる塔の部分を詳らかにせねばならない。それは「書淫」とかで補つたけど、やはり寂しい。しかし、辞書には莫大な語が在つて其処から選び出すのは厳しい。だから、省略。多分気が向いたらちょくちょくそこら辺は訂正するかも。ブログに投稿したりして。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9454m/>

洞悉

2010年10月8日13時44分発行